

女は生きる

現代名作案内

検印廃止

定価*三九〇円

送料*七〇円

昭和四〇年七月一〇日*初版発行

著者*小田仁二郎

東京都中野区大和町三八九

発行者*大沼 淳

発行所*文化服装学院出版局

東京都渋谷区代々木三ノ二二

振替*東京一九五六七〇番

印刷所*株式会社三陽社

東京都板橋区板橋四丁目四七番地七号

カバ―印刷所*株式会社精興社

製本所*大口製本印刷株式会社

女は生きる

小田仁二郎

まえがき

生きる、とはどういうことなのだろう。

ある日、ふっと、人間には女と男しかない、と考える。すると、それが奇妙な、ふしぎなことに思えてくる。事実女と男しかないないので、ふだんは考えてみようかもしれないからであった。

日常のなかに埋まっているのである。

そのため、ものが見えないのである。

女と男によって人生がくりひろげられるのを忘れていた。

女と男しかないのに、ぎょっとしたのだ。

生きる、とは――

女と男がうまれ、育てられ、結ばれ、子どもをうみ、或は独りのまま、一生を終わろうとする。

その時になって、自分はほんとに生きてきたのだろうか、と自問したとする。

自分はほんとに生きてきた、と言いうる女と男は、どれほどいるのだろうか。

人生の半ばでも同じである。

ことに、と言っては言いすぎかもしれないが、女のひとが、親の手からまっすぐ夫の手にわたり、

子どもをうみ育て、そのまま戦争もなく、天災も人災もなく、平穩無事に一生を終わるとしよう。

ここに女の幸福があるのだろうか。

それが、生きる、というのだろうか。

なにかが足りないように思えるのだ。「日本の女のひとが、いつとう生き生きと美しかったのは、戦中から戦後にかけてだ。今は、平和ムードとかで、その生き生きとした美しさも失われてしまった」と、冗談めかして書いたひとがいた。

一面の真がうかがえる。

戦中戦後の、あの異常ななかに投げこまれた女のひとが、命をまもるため、自分をいっばいに働かした。

そうしなかったら終りだ。

男だけを頼りにしては、命をまっとうすることができなかった。

この一時期、他からしいられたとはいえ、日本中の、女は生きたのであった。

そして今は、男を頼りにして命をまもることができるようになった。ムード、ムードでいっばいである。日本の中には、戦争がなく、天災があっても局地で、それ以外の地からは遠くはなれてい

る。人災も、自分の身にふりかからなければ、ゼロだ。

なにかが失われているのだ。

自分をいっばいに働かしていないのだ。

これは極端な言い方かもしれないが、人間には女と男しかない、と考えるように、ふっと、自分はほんとに生きているのか、とふりかえて自分をみつめれば、わかることではないかと思う。

自分をいっばいに、ほんとに生きた女の物語をえらんだのは、ふりかえて自分をみつめるためであった。

ここに、生きる、とはどういうことが、語られているのである。

明治、大正、昭和と、その時その時に、生きぬいてきた女のひとが、ここにはいる。

世間の常識からみれば、その女は不幸とおもえても、それは常識のわく内でのこと、ほんとは、生きぬいたひとこそ幸福なのだ。いや、幸不幸などは問題ではない。生きることが最重要である。

ある女のひとは、人生のたそがれにさしかかり、子どもに裏切られ、夫にそむかれ、すべての希望を失い、絶望のふちにおちる。だが、この女は、それまではほんとに生きてきたのではなく、ここからほんとの生が始まるのであった。

世間的の不幸によって、真の生がひらけるのである。

逆説ではない。真実である。

不倫といわれるような恋をつらぬき、まっとうした女のひとは、恋の真実に生きた。

生きる、ということとは、矛盾にみちている。

だが、その矛盾が真であつたら、矛盾を生きるしかない。

矛盾をおそれては生きられない。

これらの小説の女たちは、矛盾にみちたひとばかりと、思われるだろう。

生きようとすれば、自分の周囲のものにぶちあたる。周囲のものは、やはり女と男と、それらがつくる世界だ。そこでは矛盾を許そうとしない。生きようとする葛藤がおこる。周囲だけではなく、自分の内部にも葛藤がおこる。

これらの小説は葛藤の物語ともいえる。

しかし、小説は、現実そのものではない。現実におこったことを、そのまま描くのではなく、現実をこえて、あり得るものを現わすのである。

だから、これらの女たちは、あり得る女たちである。

現実的には、みじめつたらしく映るかもしれない。

戦争中、花の種子を、命をかけて守った女は、戦争のさなかでは、嘲笑さるべき女だった。

しかし、そこにその女の真実の生があった。

生きた女たちが、ここにはいる。

これは、雑誌「ミセス」に連載されたものである。

私は、毎月、一篇ずつをダイジェストし、そのつど、作者に会いにいき、面会記をつけ加えた。側面からの作家案内である。

特殊なひとをのぞいては、あんがい作家自身は一般に知られていない。

それぞれの作家のおもかげ、特色が、いくらかでも浮かびでていれば幸いである。

今度、本にするについて、私は、ダイジェストをやり直した。

雑誌連載のときよりも、一篇ずつの頁数がふえたからであった。

今は、視聴覚文化の時代だといわれている。視覚と聴覚をいっしょにして、そのものずばり、ものを覚えるのだそうである。

ひとつの家庭に、テレビが二台、三台と入り、そのうち、家庭録画機が売りだされるという。

タイム・スイッチをかけておけば、自分がそこにいなくとも、テレビの好きな番組を録画機が録画してくれる。

あとで、それをゆっくり、くりかえし、見られるのである。

大人たちは、動物の鹿なら鹿を、文字の「鹿」として覚えているのに、子どもたちは視聴覚文化のおかげで、鹿そのものずばりを、覚えてしまう。

そして、本を読むことは、ますます生活の上から薄れていく運命にある。

というのだが、それにもかかわらず、戦前の日本では、とうてい考えられない本の洪水が日本中にあふれている。

どうした訳なのだろう。

視聴覚文化がまだまだ初歩的段階にあるからだろうか。

いつかは、活字だけの本、声でない本は、消えていくのだろうか。

すべての本が再生機にかけられると声と画面が同時にでてくる時代が、やがては来るのだろうか。来るかもしれない。

しかし、その時になっても、活字本は存在し、読書の楽しみは変わらない。

視聴覚での「読書」は、特定の声と特定の人物、特定の風物でしかないが、ふつうの読書は、まるで違う。本さえもっていれば、いつ、どこでも、すきな時間、読むことができる。すきなところで、中止することができる。くりかえしは自由だ。そして想像は無限にひろがっていく。

ここが読書の楽しみである。

主婦の自由な時間はふえている。

本の洪水のなかから、一冊をえらびさえすればよい。

あなたは、その本で自分を見出し、自分の生を生き、無限にひろがる——それが読書の楽しみである。

これら十二の小説は、あなたを、真実の生にみちびいていく。

そして、いつかは、あなたが、十二の原作に引きつけられるのを、思うものである。

一九六五年五月

小田 仁二 郎

目次

まえがき

長流

愛の終りの時

女のいくさ

灰色の午後

花

女坂

荷車の歌

おはん

婉という女

襦襦

湯葉

たまゆら

島本久恵

石川達三

佐藤得二

佐多稲子

田宮虎彦

圓地文子

山代 巴

宇野千代

大原富枝

壺井 栄

芝木好子

曾野綾子

3

11

33

53

77

99

119

141

169

189

211

235

259

* 著者の会見記

恋を生きぬいた島本久恵さん

老年の設計と石川達三さん

すがすがしい教育者、佐藤得二さん

きびしい美しさ、佐多稲子さん

一徹の芯をひめる田宮虎彦さん

倫理の中の圓地文子さん

民話を生む山代巴さん

年月のない美、宇野千代さん

婉とのめぐりあい、大原富枝さん

どっしり重い壺井栄さん

浅草育ちの芝木好子さん

夫婦作家の曾野綾子さん

30

50

74

96

116

138

165

186

208

232

255

284

装丁 装画

小山田二郎
小堀神風

長

流

島本久恵

島本久恵略歴

明治二十六年（一八九三）二月大阪に生まれ、六歳から父母とともに京都に住む。一三歳のとき父急逝。服飾品製作などによって生計を自立しながら文学に志す。河井醉茗に認められる。二一歳、上京し婦人之友社に入社、九年間在職した。大正一二年（一九二三）より醉茗と目黒に住む。昭和五年（一九三〇）一月、醉茗と協力「女性時代」を創刊す。同誌八年三月号より『長流』を連載し始める。完結したのは、三五年十二月、「塔影」（「女性時代」改題）。二八号であった。私家版『長流』は、一五年から発行された。三六年改めて八巻本となりみずす書房より発行、翌年全巻を完了した。

祖母の数奇な生涯その宿命的な恋

私、暁子^{ぎょうこ}が十三、四にもなり、ものごろおぼえる頃には、父は亡くなり、祖母と母と三人の世すぎを身に負い、京都の仏光寺という寺の一室を借りて住んでおりました。もとからようよう煙を立てて行くかすかな暮しであったのを、それよりもなお仮りの営みという気持で、不如意をしのぶ境遇となっておりました。

如何にも賀茂川の東で一面の碁盤を据えたように、東西南北の筋目正しく寺々がならび、外郭に至るほどこまかな在家まじりになって、更にその外にまるで溝渠^{こうきょ}をめぐらすように水が流れておりました。

明治は四十年に入っていました。

もう八十の上になった祖母（菊）はさすがに衰え、明けても暮れても六尺を出ぬ床の上に、老いながらもたらず幻想のとりこになっておりました。祖母の幻想はただ一人の孫の私を人が来て伴れ去るという予感でした。

「あれ、暁が伴れて行かれる、早う、早う留めておくれ」

祖母のそういう声を、私は襖のこちらできいて、白昼にわか^{あたり}に四辺^{くわ}の昏くなるような怖れをしはし感じました。祖母と私と、何か切ない心と心が対^{むか}い合っていて、年中障子を閉めきった狭い部屋の居心地をひとしお苦しくし、気のつかぬようにしていながらいつも涙が迫っていました。

私は水のほとりに行き、ようやくその緊縛を解かれました。賀茂と疏水の二つの流れは私を迎えて、心の好きな形をとらせてくれました。

私はまだ十三、四だったとしても、心と心が対いあうのは、この頃からすでに祖母の数奇な運命が、私のなかに重なるのを感じとっていたのでしょいか。

菊が生れたのは安芸の国金山の中調子、その庄屋尾上家でした。

弘化三年の春、尾上直右衛門の愛娘、菊は芳紀十八、一里あまりの上流温井の郷の旧家土井家に嫁ぎました。

この辺りの河すじ、鮎の子が二寸ぐらいになつてのぼり初め、何処となく菜の花のにおいがして、竹林のさきが煙るような夜でございます。

尾上家の菊は土井家の門をくぐり、土井庄三郎と三献の儀を済ませました。

さても更け行く夜の底に、今宵ぞ新枕、千代の契りを交すことでございます。

離れ座敷は朧夜の空につつましく、ただひっそりとしておりました。もとよりそこは誰ももう窺うことが出来ませんで、ただ夜の更けるに任せるとはいえ、これはまた何んという白けようか。紫の厚衾は、いつまでも敷かれたままの行儀にあって、人は二人いつまでも無言で相對しているのでございます。何故か庄三郎は、この清き新妻に対して、最初から一種異様な圧迫を感じ、殊にここに来てますますそれが激しくなつて、一言もものをいうことが出来ないのでございます。

菊がうまれつきから育ちから、全くその身に持っていぬものは、艶と可憐の二つでした。その上

この我から崩れぬ花嫁は何か左の眼に強い凝集ぎょうしゅうを示すものがある。きらりとした斜視。

斜視というものは、それが極く軽い場合は、何となくあやしい魅力がありました。霊性の一時的喪失を感じさせるとでもいうか、一つの危険な信号をつとめるとさえ申します。それは外らすことの出来ない眼でした。況んやその眼に甘美な情欲をどうして感じられましょう。白一いろの死出の装束のような花嫁よそおいの今夜、菊はひとしおに打上って威高く冷たいかのように見えるのでした。

菊の処女妻の夜々がいつまで続いたのでしょうか。それもおわりになって、菊は生れてはじめて知った男の異常な情熱に驚き驚き、燃えるような熱さのいつまで経っても冷めない臥床の中に、苦しくて苦しくて汗に浸って、夜のあけるのを待って待って、けれど何故かその苦熱の中に安住しきったような、ものやわらかな涙がながれて枕紙を濡らし濡らし致しますのは、女の心に既に正しい判断の据ったしるしでございましょう。肩にかかっている手をそつと外ずして音のせぬように起きて庭に下りて、噴き井の水に口をすすぎ、手を清めて、暁の明星を仰ぎ、涙と共に掌を合せました。とり残された床の中にひとり眼がさめて、庄三郎は、ここ数旬のもやもやとした苦しさと、狂乱に紙一重のあやしい半夢半醒から忽然としてさめた心地でございましたが、その久しぶりに知る清しさの中で、何でもこう空しいのか、ありありといま彼の前に拡がるものは、性体の知れないただだ虚無でございました。

この空しさは、これはやっぱりほんとうに妻が自分を相手にしてくれていないのだという気がす